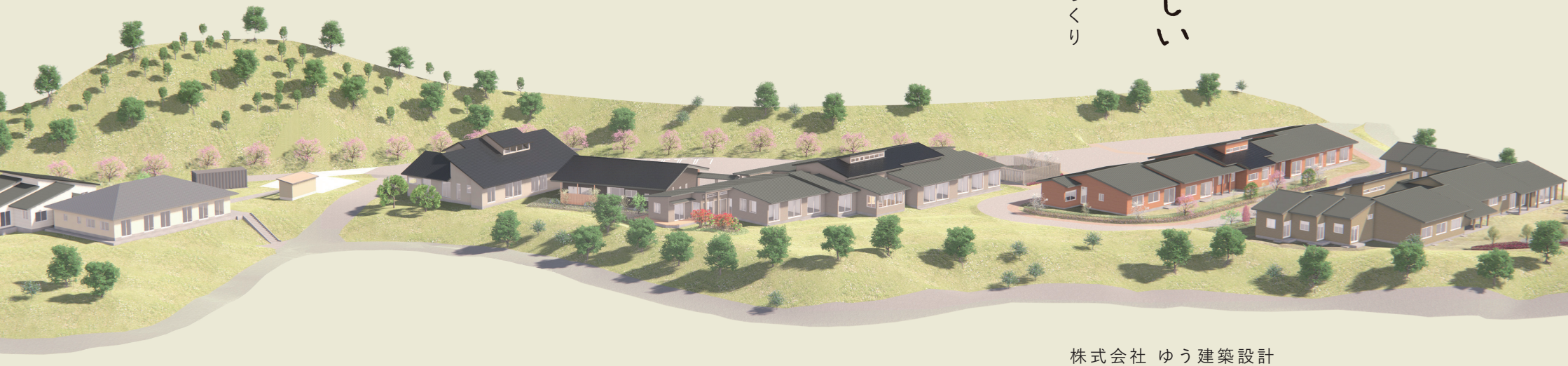
株式会社 ゆう建築設計

Kyoto Office　京都市中京区堀川通錦小路上ル四坊堀川町 617 番地　〒 604-8254
TEL 075-801-0022 FAX 075-801-8290
Tokyo Office　東京都港区芝大門 1 丁目 4-8 浜松町清和ビル 7F　〒 105-0012
TEL 03-6721-5430 FAX 03-6721-5431
E-Mail : office@eusekkei.co.jp

https://www.eusekkei.co.jp/

自閉症へ寄り添うすまいがほしい

ゆめふる成田の施設づくり



株式会社 ゆう建築設計

天井から蚊帳へと小さな穴をつくって引き入れた電球をつける。ただそれだけでも、中は和紙の柔和な照りかえしで明るさが満ち、電球のあたたかさとわたし自身のぬくもりで、寒さというほどの寒さもありません。
それはもう曠野の中の小屋という感じではなく、なにか自分で紡いだ繭の中にでもいるようで、こうして時を待つうちには、わたしもおのずと変性して、どこかへ飛び立つ時が来るような気がするのです。

—森 敦 「月山」より

ゆめふる成田 全景

田畑を見下ろす小高い丘にひろがる「ゆめふる成田」全景。北側の高台にはキャンプ場やサイクルロードなどを擁した市の運動公園がある。建物手前から冬棟（増築）、中央に生活介護棟（ゆめテラス：改修）・支援棟・秋棟。赤い建物が春棟、その奥に夏棟。

自閉症の人が主人公になる住まいをつくる

ゆう建築設計　河井 美希

多くの自閉症の方々が暮らす知的障害者支援施設「しもふさ学園」は1988年の開園から35年を経ます。子供のころから生活してきた方たちも大人になり、人生の後半を歩むにあたって、住環境の軌道修正が必要となりました。

彼らにとってふさわしい住まいとは？ 安心して暮らすことの出来る場所とは？ 長年にわたり彼らと共に過ごしてきた菜の花会の豊富な経験と知識をもとに、なんども意見を交わし考え抜いて完成したのが「ゆめふる成田」です。ゆう建築設計は幸運にもこの設計者に任命され、建物完成までの過程をつぶさに目にしながら多くのことを学ばせてもらいました。この建設にかかわることとなったきっかけと四苦八苦した日々について、本のおわり「ゆめふる成田と格闘した日々」に包み隠さず記しています。読んでいただくと菜の花会の支援の基本的な考えやこのプロジェクトが進んでいく過程がよくわかると思います。

ゆめふる成田の特徴は何といっても、ひとり一人に合わせてつくられた個室と、６人ユニットを基本とした少人数の生活空間にあります。個室は、趣味や課題を行う場所・寝る場所がゆとりをもって確保できることを前提としています。そこに住まう方の楽しみ・得意とすること・強いこだわりなどをできるだけ理解したうえで、そのひとが安心できる部屋はどんなだろうと試行錯誤しながら仕様をきめていきました。カラオケルーム付きや専用玄関付きといった、とても特徴のあるお部屋があるかと思えば、ごくごく普通のシンプルなお部屋もたくさんできました。

生活単位を４棟８ユニットと小さくすることで、環境に折り合いをつけることが苦手な方々がすこしでも自分の世界を守りやすくできるのではないかと考えています。１ユニットの定員は６人ずつです。きっとそれでもしんどい方もいらっしゃるでしょうし、もっと大人数でも穏やかに暮らせる方もいらっしゃるでしょう。いろいろなバリエーションをつくることも考えられますが、なにぶん部屋数は47室もあります。支援配置が複雑になりすぎるのも好ましくないため、ユニットの定員はひとつに定めました。そういったなかで、支援量・人間関係・障害特性などをじっ……と睨み、部屋割りが決められました。

ゆめふる成田のように入居される方が初めから決まっていて、その人だけの建築をするということは、ふつう考えられないでしょう。不特定多数を対象に同じお部屋にした方が簡単ですし、汎用も効き、価格も抑えることができます。14畳という大きさの個室や小ユニットというのも、ずいぶん贅沢なことだと思われるに違いありません。けれども菜の花会はそれらをすべて承知のうえで、自閉症の方の特性やこだわりにとことん付き合うという思い切った決断をしました。

『人』が『主』人公になれること、それが『住』まいである。
ごく当たり前だけれども見過ごされがちなこの考えを自閉症の方の住まいで実践しようとするのが「ゆめふる成田」です。全国の入所施設の多くがいま建て替えの時期を迎えています。つまり、今現在暮らしている方のひとり一人の新しい住まいに向き合う時が来ているということです。敷地・予算・人員など多くの課題があるなかでどこまで考えることができるか。

私たちはこの建物を通じて、住まいの原点に立ち返り障害のある方の暮らしをイメージすることの大切さを伝えていきたいと思っています。

細い曲がりくねった道を進
むと田んぼの向こうに見え
てくる支援棟。

夏棟。敷地に沿って雁行した東ユニットの個室が並ぶ。ここを抜けると南側に広場が広がる。

上／個室（夏西-2）。家具は置かれない。固定されたベンチは、明るい窓辺に座りたたずむために設けられている。 右／個室（夏東-3）。建具によって区切られた部屋。廊下の喧騒を抑えるための前室があり、余暇の場所（リラックスルーム）と眠る場所（ベッドルーム）を明確に分ける。

タモ材の個室の扉。「60代を迎えようとする、一生懸命生きてきた一人の大人が暮らす部屋にふさわしい扉にしてほしい」との思いを受けて製作された。

春棟廊下。春棟は個性的な個室が多い。右側はカラオケルームを備えた部屋の通称「みてみて窓」。

夏棟 東ユニットの廊下。V字型配置された個室群に沿って少しずつ折れ曲がり、隅に小さな居場所が生み出されている。

ゆめふる成田　各棟の紹介

ゆめふる成田は4つの生活棟(夏・春・秋・冬)と生活介護棟(ゆめテラス)、そして支援棟で構成しています。4つの生活棟において、個室を6室ずつ東西に分けて共用の食堂と浴室を設けているという点は各棟ともおなじです。しかし、ひとつひとつ見ていくとそこにはやっぱり違いがあります。

夏棟

特別支援が必要な方々の過ごし方をかたちにした棟

夏棟北側の柔らかな光が差し込むテーブルコーナー。洗濯物を畳む、物書きをする、ただ佇む。仲間や支援員とゆったりとした時間を共有する場所となる。

まず全体にV型に配置された個室群が目を引きます。その形態は敷地の形状によって生まれたものですが、自室だけではなく廊下のちょっとしたスペースで過ごされることが予測されるこの棟では、このうねうねした廊下が安心できる居場所を生み出すと考えました。

東西ユニットにはそれぞれに玄関があります。西側のユニットへ入居される方は、ほぼ常に見守りが必要であり、4棟8ユニットのなかで唯一、鍵をかけています。そのため見守りのできる屋外スペースとして専用の中庭を設けました。廊下に固定されたテーブルやベンチのあるスペースには、北側の安定した光を多く取り入れました。余暇の時間を自室に限らず共用部でも心地よく過ごしてもらいたいと思っています。時にはスタッフもそこに加わりコミュニケーションが生まれます。

壁紙を剥がしたり、エアコンなどの機械を分解する方がいらっしゃいます。そのため西ユニットの壁は塗装とし、さらに天井を3mと高くして天井のエアコンなどに手が届きにくくしています。結果的に心理的にもゆったりとした場所となっているように思います。

食堂が東西のうち西ユニットに属しているのも夏棟の特徴です。利用者の移動のしやすさ、支援の行き届きを考慮してここに設けました。12人全員が揃っての食事では落ち着かなく、数チームに入れ替わりながら食事をとります。さらにテーブル同士の食事スペースの距離を確保するために4棟の中でもっとも広い食堂となっています。中庭に向かうパーテション付きの一人用テーブルは食事に集中できるように計画しました。

浴室は4名が同時に使用する想定で、他の棟(2名)よりも広く作られています。脱衣場では衣類が気になる方がいるため、脱衣棚とベンチの距離をとっています。

個室は14畳を標準としていますが12畳タイプが3室あります。落ち着きを考慮して家具類をほとんど置かないほうが好ましいと考える方の居室(西-4~6)は14畳ではがらんとしすぎてしまうので、12畳としています。

ほかの棟の個室にも共通していることですが、余暇を過ごす場所と寝る場所は木製のスクリーンで分けています。家具や装飾品を置くことができない部屋であっても、こうした木製の造作材があることで多少なりとも温かみを感じられるのではないでしょうか。

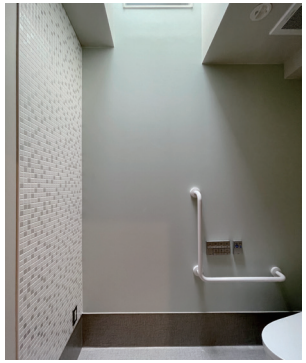
左／食堂。一人用のテーブルや固定カウンター席が作りつけられている。中庭のある南側からたっぷり陽を採り入れるためにハイサイドライトを設けた。
右上／西ユニットの個室。めくれやすい壁紙は使わず塗装仕上げとした。設備に手が届かない高い天井。木製のスクリーンが飾りつけのできない部屋にもぬくもりを添える。

春棟　男女のユニットが混在するバリエーションに富んだ棟

端にある個室（東-6）入口。暑さが苦手、人の出入が気になるといった方のため、2面窓のある角部屋とし、扉前にはアルコーブを設けた。

夏棟と同じく春棟の東西ユニットにはそれぞれに玄関があり、西が女性、東が男性です。他人と暮らすにはいろいろな意味で相性が良いことが好ましいのですが、そもそも女性が極端に少ないことから、女性メンバー全員が同じユニットとならざるを得ませんでした。それでも、これまでしもふさ学園の北館で共に暮らしてきた経験があり、支援者側もよく彼女たちの特性を理解されているため、お互いの暮らしを守ることはできると判断されました。女性の支援員が夜勤にあたるため、仮眠ベッドのあるスタッフコーナーは西の女性ユニット内に設けています。

春棟の方々は日記を付けたり、PCや音楽を楽しむなど、自室で思い思いに過ごすことができます。そのため個室のバリエーションも富んだものとなっています。カラオケルーム（西-1）、お部屋のようなトイレ（東-1）、飲み物を準備できるキッチン・洗濯機（東-4）



左／食堂。食べ物への拘りや他者の干渉を嫌う方のために、ブース付きのテーブルを3つ用意。ハイサイドライトが南北に長い食堂全体に光を届ける。 右／個室（東-2）のトイレ。トップライトから差し込む光の下には、水の流れを楽しみとする方のために水鉢が置かれる予定。

……etc.。そのほか、人の出入りが気になる方（東-6）は廊下から入組んだ端の位置へ、足の悪い方（西-1）は食堂や浴室に最も近い場所とするといったユニットの中での配置上の工夫も行っています。

各ユニットの玄関わきには自室以外で過ごす場所として、デイコーナーを計画しました。送迎の待合や、支援員とのコミュニケーションの場所でもあります。

食堂は基本的に全員が一緒に食事をとります。他の人と同じテーブルでは落ち着かない、ほかの人のおかずが気になるという方向けに、1.7m高さの個別ブースを3つ用意しました。キッチンは、ここですべての配膳をし終えることができるよう十分な広さをとっています。

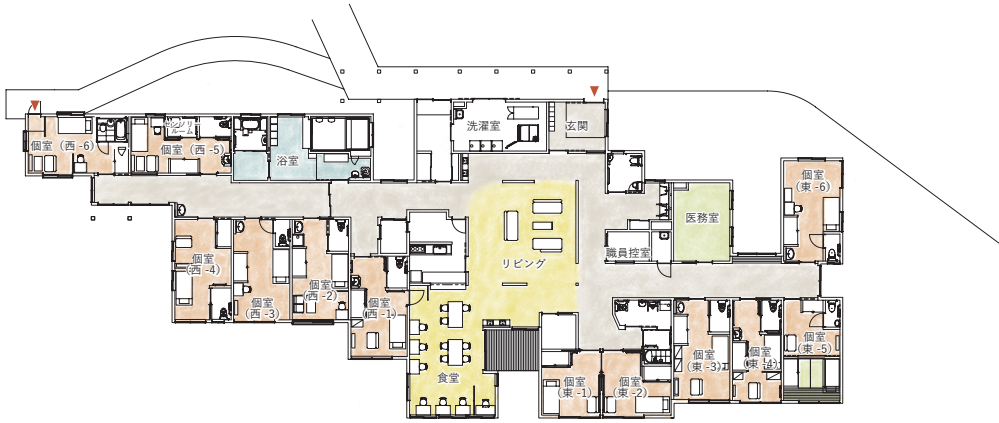
秋棟

なかまとのびのび過ごすリビングのある棟

上／個室(西-4)。体を壁にぶつける行為に対してクッション性のある床材を壁に採用した。トイレに行きやすいようにベッドエリアの近くに配置している。 左下／食堂につながるリビング。玄関から奥の食堂まで視線がのびやかに抜ける。秋棟だけに、みんなで過ごすためのリビングがある。右下／個室(西-6)への専用アプローチ。他の利用者から離れた暮らしができるようにしている。

視力障害、発作、体に不自由があるなど身体的介助も必要とされる方が多く入居されます。東西のユニットに別れてはいますが、ほかの棟ほど明確に過ごす場所を規定していないのも特徴です。総じてみなさん静かに過ごされ、食事や余暇の時間を共有することができるために、ほかの棟にはないリビングが設けられました。リビングにはソファや置き畳など、可動式の家具を状況によって自由に配置する設定で、照明はそれを縛らないものとしました。リビングと食堂は緩やかにつながっており、のびのびとした過ごし方にあっています。

個室の特徴としては身体的な障害に配慮したものが多いです。視覚障害のある方の部屋(東-4)はあえて間口を小さくして伝い歩きがしやすいように。足の不自由な方(東-1・2)には専用のユニットバスと介助の出来る広さのトイレが付属しています。兄弟のように育ったこのお2人の部屋は直接行き来ができるようになっています。対人過敏の方(西-5)のお部屋は大きな窓がありません。廊下にふんだんに取り入れた自然光を間接的に高窓から採取することで、柔らかい光がそそぐ落ち着いた部屋となりました。この部屋には押し入れサイズのセンソリールームがあります。(西-6)の方も人との関わりが大変苦手です。ほかの利用者に会うことがない生活もできるような工夫が必要で、専用の外部ドアと浴室を設けています。



冬棟

個室性が強い、マイペースに過ごすことができる棟

ほかの棟から少し離れたところにはもともとグループホームがありました。そこを短期入所棟に変更して、北隣に6室増築したのが冬棟です。ここでは、個々人が自分の時間を大切に、マイペースに過ごされます。それゆえ一部屋ごとに雁行して配置し、個室の独立性を保つようにしました。また、この形態にすることで各室へ南側から自然光を採り入れることができました。

上／個室2。個室ごとにベッドやテレビ、自立課題のデスクといった家具の配置を想定している。エリアを区切るスクリーンはその目的により光の透過性別に3種類を使い分けた。左下／マイペースな生活スタイルにあわせて一部屋ごとに雁行した配置となっている。廊下の窓は外との関係を抑制しながら慎重に配置した。

外観。切妻屋根が連なる個室部分と低い屋根の廊下で構成。外壁の色は各棟の名前のイメージに合わせており、冬棟は白色とした。

春棟のデイコーナーや秋棟のリビングのような他者と過ごすための部屋を特別に用意してはいませんが、浴室の前の廊下に広い空間をとり、そこにテーブルやイスを置く予定をしています。職員とのコミュニケーションや入浴後の休憩に利用します。

人形作りに没頭するあまり、食事・排泄行為が乱れがちの方の部屋（個室-1）は、製作部屋・寝室をしっかり分けてベッドですべての用を済ますということからの脱却を試みようとしています。また、他人に触れられることを嫌い、距離をとりたい方の部屋は外部からの専用玄関を設けました（個室-6）

支援棟

感情の演出からのリセットをする支援者のための棟

支援棟へ戻るとまず目に入る休憩スペースと1本の太い柱。支援員こそがゆめふる成田を支える存在であるというメッセージを込めている。柱の手前右側が扉のないミーティングルーム。

ゆめふる成田には支援員のためだけの独立した建物があります。支援員同士で行う会議や意見交換、外部の方との面談の利用のほか、支援員の更衣や休憩場所としても使われます。支援員も利用者と同じ空間を共に過ごすのが菜の花会のスタイルです。そのため設計当初は支援棟でも利用者と一緒に休憩するような場所や、建物の中と外で視線が交わる空間をイメージしていました。しかし理事長の次のような言葉で、設計の方向性を大きく変えることになりました。

「私達の仕事は、感情労働といわれています。常に利用者と向き合い、利用者の状態・感情を優先し、自分の感情をコントロールして働いているのだから、支援棟は利用者から完全に離れて感情の演出からリセットできるような場所でなければなりません」

「利用者は好きな時に好きなものを食べたり飲んだりできません。そのため、支援員が自由にコーヒーを飲んでいる姿が見えるのは、利用者も休憩している支援員も辛いものがあります」

確かに実際の支援の様子を見せていただいたときの、支援員の穏やかな言葉遣いや、何かを利用者に強制することはなく行動してくれるまで待つ姿が印象に残っています。

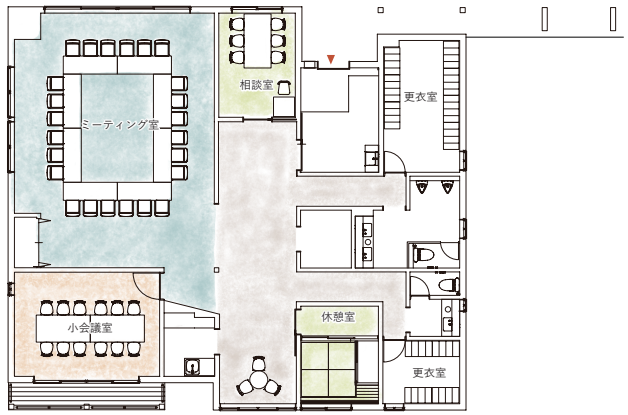
支援員の心と頭の切り替わりを自然にサポートし、よりよい支援に結び付く場所とはどんなものだろう。コンパクトで機能的でありながら、のびのびとした空間にもしたいと考えました。

まず、玄関から入ってほっとできる場所が目に入るように、突き当りには大きな窓と休憩スペースをとりました。当初は、壁一面を窓にすることを考えていましたが「外から覗かれないようにカーテンを閉めようか」ということを聞いて慌てて考え直しました。陽の光を感じ、雲の動きをみながら過ごしてほしいけれども、休憩している様子が外にいる利用者から見えないように、思い切って高い位置に窓を設けました。

菜の花会では支援員同士のコミュニケーションをとても大切にしています。そのため、皆が集まる大きなミーティング室には扉がありません。この棟へ戻ってくる人、これから利用者のもとへと向かう人、お互いの様子をそれとなく気遣えるようにしています。

とはいえ、夜勤明けで運転する前に仮眠をとる時や、台風などで泊まり込まないといけない時には一人になれる場所も必要です。小さいけれども畳のある休憩室もつくりました。

支援棟の真ん中には太い柱がトンと1本、据えられています。支援棟の大黒柱と呼んでいます。この柱に目をとめることで気持ちを切り替えるきっかけになってほしいと思うと同時に、支援員がゆめふる成田を支えており、この柱のようになくてはならない存在なのだというメッセージを込めています。



春棟と夏棟。建物の間をめぐる道が利用者の生活道路となる。

ゆめふる成田と格闘した日々

これは竣工の4か月前、2023年5月に書きました。菜の花会の支援に対する考え方、ゆめふる成田にかける思い。そのことに応えようと四苦八苦した日々を、設計監理者の視点を通じてありのままお伝えするものです。

ゆめふる成田と格闘した日々

河井 美希

はじめに

現在、私は新築工事中の障害者入所施設の内装材を選定中だ。春棟・夏棟・秋棟・冬棟と名付けられた４棟８ユニットの建物への入居者は既に決まっていて、彼らのプライベートな個室には一人ずつ定められた仕様がある。その仕様は内装材だけに限らず、コンセントや照明、建具などにも及ぶ。

そのため現場への指示は丁寧におこなわないとうっかり間違えてしまいそうだ。○○さんは、壁は塗装で天井は吸音板、床は巻き上げ。△△さんは、壁は分厚く、天井は高く。窓はシャッター付きで、建具のレールは脱輪防止……。その人自身がどういう方なのか、イメージを持っていないとすぐに混乱してしまう。

どうしてこんなに手のかかることをしているのだろう。

それをお話するには、この「ゆめふる成田プロジェクト」を立ち上げた、類まれな求心力・推進力を持つ菜の花会の小林勉理事長との出会いからはじめる必要がある。長くなってしまうけれども、どうぞ終わりまでお付き合いください。

すべてはここからはじまった。 菜の花会理事長 小林勉氏との出会い

2016年秋、ゆう建築設計では最初の障害者建築を紹介する「知的障害のすまいを考える」という法人向けセミナーを開催した。そこでは入所施設・グループホーム・通所施設と、いくつかの実績の紹介を通して、設計事務所の障害者建築への姿勢や工夫を伝えた。全国にこの分野を専門的に行う設計事務所はまだまだ少なく、ありがたいことに各地の福祉法人からたくさんの参加があった。その会場の最前列、ど真ん中の席。いかにもさぁ、聴いてやるぞとばかりに目をかがやせて座っている男性がいた。それが小林勉氏である。

このセミナーでゆう設計の考え方に賛同し、設計依頼の声をかけていただいたかというと、実はそうではない。むしろ逆で、我々の障害者のすまいへの考え方に真正面から意見をぶつけてきたのである。

設計したある入所施設のワンシーン。そこでは利用者の一人が廊下に面したデイルームの陽の当たる床に、巾木にもたれて気持ちよさそうに寝そべっている。私たちはその光景をほほえましく思い、わが意を得たりとした紹介を行った。そのときである。はい、と小林氏は手を挙げてこういわれた。

「ここで床に寝そべるということをあなたならしないでしょう。自分でしないということを利用者がしていて、それが良いのだというのはおかしい」。

返す言葉もなく、私たちは皆黙り込んでしまったと記憶している。おそらく貴重な意見にお礼を述べることが精いっぱいであったと思う。セミナー参加者のほとんどが、設計事務所が障害者建築を本気で取り組んでいることに賞賛してくれるなかで、この意見は衝撃的であり、思い出すと時々胸がチクリとする、そんな出来事であった。

それから4年後のこと。千葉県で日中支援型のグループホームの設計を行うこととなったゆう建築設計の担当者が、そこの法人と共に同じ千葉県の成田市にある菜の花会の入所施設「しもふさ学園」を見学に訪れた。私自身はその物件の担当ではなかったため同行していないが、かつてのセミナーでのほろ苦い記憶が担当者にも思い出されたに違いない。しかしである。折しも「しもふさ学園」の移転新築を構想されていた小林理事長から、なんと「ゆうさん、してもらえる?」と声がかかったのである。今にして思えば、建物への考え方は法人が決めるのであって設計者は技術的な部分をしっかり設計してもらえたらいいから、ということであったのだろう。それでも、障害者の建築をこつこつ真剣に設計し続けているゆう設計を、ある程度評価してもらったうえでの依頼だった。

理事長、広大な敷地を前に野望を語る

幸運にも私と川﨑・木内(元所員)の3名がこのプロジェクトの担当となった。小林理事長は訪問した我々をまず、新しい入所施設「ゆめふる成田」の建設予定地に伴い、野望とでも言うべきプロジェクトへの構想を語ったものである。

敷地を見下ろす高台からゆめふる成田の構想を語る小林理事長(中央)と藤﨑センター長(右)。

敷地の規模はなんと26,000㎡。そこに40人のすまいを4棟。そして支援員のための棟を建設。すべて平屋で。高台から広大な敷地を見下ろす我々のまぶたには、一つの集落のように連なる屋根の風景が浮かんだ。

ここに手渡された理事長のスケッチがある。

春・夏・秋・冬と名付けられた4つの棟。そしてユニットと思われる東西ウィングに分かれたエリア。ひとつのユニットは6名ほどの定員。生活介護棟(既存“うぐいすホーム”からの用途変更)に最も近い秋棟には支援棟が接続している。ここに入居される方には特に介護がいるのだろうか。そして夏棟と春棟が同じように描かれてはいるが、春棟のほうはぐるっと道で囲われている。緑に囲まれた安全な散策路を設けつつ、送迎もあるためか右上に小さく車の絵もある。冬棟は既存のグループホーム(フレンドリーホーム)を増築する形がとられている。この棟は他の棟より離れた場所に建つ。左上のさらに離れたところにはまとまった駐車スペースがある。

このスケッチからは、すでに人々の生活イメージが出来上がっていることがうかがえる。名前は夢が降る・フル(満タン)の意から「ゆめふる成田」に決まった。

「ゆめふる成田」打合せがはじまる

2021年1月。いよいよ具体的な打ち合わせがスタート。我々には「自閉症とは何か。特性理解・行動障害への対応」というレクチャーが用意されていた。講師は千葉県自閉症支援センター　副センター長の田熊 立氏である。ゆめふる成田はその入居者のほとんどが自閉症の方である。「自閉症」に対する理解が不足していると、これからの建築設計や打合せに大いに支障がでてしまうことが予測されたため、心配されてのレクチャーであったに違いない。これまで強度行動障害への建築的対処へのノウハウは蓄積されてきたが、そもそもなぜ行動障害に至るのか、自閉症がどんなものかなのかは正直いってよくわかっていなかったため大変ありがたい講義であった。しかしこれで理解できたかというとそうではなく、はっきりとしたのは“自閉症”とはこうだと一言で言いあらわせない、説明しがたいものであるということであった。

そのようなあやふやな理解ではあるが、きわめて人間的で複雑なものであるという前提を得たうえで計画がスタートできたのは、その後の打合せを振り返ってみても大いに重要なことであったと思う。

「ハート＆ハート宣言」と「スタイル40」

それからゆめふる成田の設計者として任命された我々にふたつのことが伝授された。ひとつめは菜の花会の行動規範ともいえる「ハート＆ハート宣言」である。

ハート&ハート宣言

利用者さんひとり一人をあるがままに理解し、障害特性を充分に配慮した支援をするとともに、お互いを思いやり、楽しみあえる「ハートとハート」相互関係を大切にする

どんな法人でも「障害特性を充分に理解した支援を」しようとしている。だがその難しさが身に染みているからこそ“宣言”という形をとり、時々立ち止まって、支援の姿勢を振り返るように戒めているのにちがいない。ハート&ハートの関係とは日々の生活でのお互いの存在感・充実感・感謝を忘れないことである。支援する側とされる側という関係以前の人間同士の関わりあいなのだ。

ふたつめは、入居者40人それぞれの能力や楽しみに精一杯付き合おうという姿勢で、その名も「スタイル40」という。

以下は自閉症の多様性に対応した個室として我々に示された一例である。

・ひと同士の安心できる距離は、人によって異なる。友達と襖で仕切られた部屋。
・自分の能力を発揮できる洗濯機やミニキッチンを備えた部屋
・飾り物がある部屋もいいけど、なにもない方が落ちつく
・トイレの中が一番いい
・繭の中の生活が好き（人によって安心できる環境は違うということを森敦の『月山』に出てくる情景を引き合いに説明頂いた）

このようにスタイル40とは、人が建物に合わせるのではなく建物が人に合わせるという、個人住宅であればまだしも、施設ではなかなか実現しえない試みである。個人に合わせて造るとそのあと人が入れ変わった時どうするのかという心配や、今後の設計や施工の難しさが容易に予見され、初めのうちは思わずしり込みしてしまった。しかし法人ではとうにその覚悟はできていることが理事長をはじめセンター長、施設長たちの言動から十分に伝わってきた。そうだ、建物を使い続けるのは我々ではなく、彼らである。その彼らが腹をくくっているのならば、もうそれに付き合っていくしかないではないか……。

こうして自閉症の特性・こだわり行動を“認める”ということを最優先と考える「スタイル40」を合言葉として、ひとり一人に合わせた「ゆめふる成田」の計画を進めることとなった。

受け身ではいられない。わたしたちのスタイル40

「利用者のお部屋のことは僕たちに任せて、構造とか設備とかいったようなことと、あと……共用部分はお願いします」。
計画当初そう告げられた言葉には、ここに住む人たちひとり一人のことは僕たちが一番よく知っているから任せてくれたらいい、ということと、法人内の検討会でも引き続き考え続けなければいけないということのふたつの意味があったと思う。確かに、30年以上入居メンバーと共に過ごしてきた理事長たちには到底個人への理解は及ばない。

でもそれでいいのだろうか。建築は支援のひとつであり、建築のもつ力は決して小さなものではないと信じている。そんな我々にしかできないこともあるはずである。そしてなによりも、このままではとてもスタイル40を設計しきるだけのモチベーションは保てないだろうと思った。そこで我々は自身を鼓舞する意味も含めて、もっとしもふさ学園を知るために3日間の学園滞在を申し入れた。

理事長からは、彼らのことを知りたければ半年以上働いてもらわないと何もわからないよと冗談ぽく言われたが、我々に必要なのは職員と同じレベルでの理解ではなく、設計者としての別の視点を持つための手掛かりを探すことである。そこでこの滞在の目的を次のように定義し、設計チームで共有した。

支援者はどんな視点でいるのか、利用者がどんな気持ちで過ごしているのだろうか。
われわれはそれを”感じる“のである。

この滞在に備えて、菜の花会には惜しみのないの協力をしていただいた。暮らしの場である「生活館(東館・北館・南館・西館)」での食事や入浴、作業場での様子のほか、食後と入浴までの間の“すきまの時間”の観察に十分な時間をあて、その間も職員からはひとり一人の個性について説明を聞くことができた。ご本人の様子を直にうかがいながら聞くお話は、我々の想像力を膨らますのに強力なサポートとなった。とくにありがたかったのは、この滞在の目的はスタッフや住まい手の動きを調査するのが主ではなく、感じることにあるということを尊重してくださり、“ただ眺めるだけ”という状態を許容してもらったことである。

お風呂上りに髪を乾かし、ローションを塗る。朝、作業場へ出かける前にはお出かけ着に着替える。そういった「みだしなみ」を大切にした取り組みが、なかでも印象に残っている。
この滞在により、お一人ずつの顔と名前が一致して、その後の打合せがスムーズになっただけでなく、法人の示す各人への仕様(スタイル40)への理由も腑に落ちた。そしてなにより特定の人のために設計をしているということに強いやりがいを抱くことができたのである。

スタイル40をかたちに

建物をどう配置するかというのは設計の醍醐味のひとつである。建設地は遠く山々に囲まれ、ふもとには田園風景。まわりにはほとんど民家はなく、交通量の多い道からは少し入ったところにある。そのようなのどかで開発されていない場所に40人のすまいが出現する。建物はすべて平屋であるため、横のボリュームは自ずと大きなものとなる。はじめに理事長から配置のスケッチ(p.29)を貰っていたためそれに引っ張られた感はあるが、そもそもそのスケッチがたいへん生き生きと魅力的であったため棟の関係性といったポイントは素直に採用させてもらった。

配置検討の様子。傾きや距離感を決めていった。

4棟7ユニットのどこに誰が入居されるか、それは法人から示された。この人は建築的な仕様上、絶対この棟であるという場合もあれば、どこでも大丈夫だけれどもメンバー同士の相性により決まることもあった。また6室のユニット内でも、食堂やお風呂など共用部に近い部屋となる人や、声が大きいため端のお部屋になった方もいる。いずれにしても暮らしの場が少人数であることは、周囲との折りあいをつけるのが苦手な人々の行動障害をできるだけ改善するために好ましい環境であることは言うまでもない。

個室を6室ずつ東西に分けて共用の食堂と浴室を設けているという構成は4棟とも同じである。建物に明確な差が出にくいのは自閉症の状態がはっきりとした境界線をひきにくいことから自閉症スペクトラムといわれることと、偶然ではない類似性を感じる。けれどもひとつひとつ見ていくとやはりそこには違いがある。

夏棟の西ユニットは自閉症の特性によりその行動を特に注意深く見守るべき方が多くいて、夏棟の食堂は西ユニット内に設けられた。食堂でのパーソナルスペースをしっかりとるための広さに加えて、食事の時間もずらす予定だ。

春棟は西が女性、東が男性。そもそも女性が極端に少ないことから、女性メンバー全員が同じユニットとなった。だが、現しもふさ学園の北館で共に暮らしてきた方々であり、支援者側もよく特性を理解されているためお互いの暮らしを守ることができると判断された。この棟は得意とすること、好きなことができるような個性的な部屋が多い。

秋棟は発作や体に不自由があるなど身体的介助を必要とされる方が入居される。集団での食事や余暇を過ごすことができるために、ほかの棟にはないリビングが設けられた。

冬棟は、よりマイペースに過ごされる方が集まっていると言って良いと思う。それゆえ、ひと部屋ごとに雁行して、より個室性を強調している。

個室帳の作成

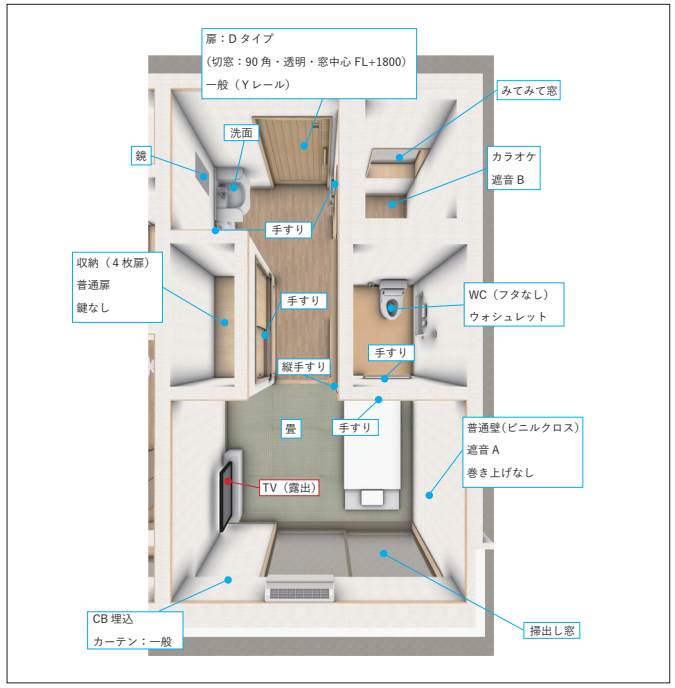
法人との共通言語として、また勘違いをなくすために個室帳なるものを作成した。"スタイル40"を構成する仕様が遮音性、内装材、建具、洗面、トイレなど項目ごとに選択できるようにし、その数は47にのぼる。標準的な部屋の広さは14畳。施設基準に比べてずいぶんと広いが、個室内でもくつろぎの部屋、寝室、水回りをわける住まいを目指すゆめふる成田では、これは譲れないことであった。

	項目	選択肢				備考１（基本事項）	備考２（個別対応）
1	部屋サイズ	１４帖	１２帖	その他		家具が少ない方は 12 帖タイプ	
2	収納	扉有（普通扉）	扉有（堅牢扉）	オープン収納	別室管理	扉は原則引き違いとする	4 枚扉：手すりが必要な為
3	収納鍵	あり（同一キー）	なし			ＭＫ対応	
4	天井高さ	2.5 m	3.0 m			3.0 m：天井設備破壊防止	
5	間仕切壁	標準（GW100）	遮音 A	遮音 B（カラオケ）		標準と遮音 A の遮音性能の差：約 4db	
6	壁最表面ボード種類	普通石膏ボード	硬質石膏ボード				
7	壁仕上	クロス	塗装	ハイクッションコート	その他	ハイクッション：自傷のある方	
8	入口ドア	一般（下レール無）	一般（Ｙレール）	堅牢（Ｙレール）	堅牢（SUS レール）	ソフトクローザー無し	切窓はすべて D タイプ（90 角・透明・窓中心：FL+1800）
9	間上　有効開口	800（一般）	850（車いす）	1100（ベッド）			
10	間上　把手	把手	掘込引手				廊下から利用者さんの状況確認
11	居室鍵	内サ／外シ	内 空／外シ（電気錠）	内 空／外 空		ＭＫ対応、同一キー	
12	居室内間仕切の扉	あり	なし			共用部からの気配を低減	
13	居室内手すり	あり	なし				H700
14	寝具	ベッド	布団				
15	床仕上げ	長尺シート　t 2.8	長尺シート　t 2.8 ＋ アンダーレイシート	畳			部立ちするため、アンダーレイ機能
16	巻き上げ床	あり	なし			放尿等対策	
17	窓形状	掃き出し	腰窓				座って過ごすため、外を見たい
18	窓シャッター	あり	なし			安眠確保 / 刺激遮断	
19	窓施錠	サムターン	鍵付サムターン	電気錠			
20	窓ガラス（強度）	普通ペアガラス	強化ペア	内部ポリカペア			
21	窓ガラス（透過性）	透明	型板				
22	二重窓	あり	なし				
23	カーテン	一般	パイプ式	2 重窓内			
24	物干し場	外のみ	内のみ	内外とも	なし	可動	可動式美品対応（210820）
25	テレビ	あり（ＢＯＸ）	あり（露出）	なし			
26	トイレスペース	あり（一般）	あり（介助スペース）	なし		タンク式	
27	便座	普通	暖房	ウォシュレット	自動洗浄		清潔を保つため、ウォシュレット
28	便座　フタ	あり	なし				
29	小便器	あり	なし				
30	洗面台	住宅型	施設型	介助型			
31	洗面水栓	自動水栓 A	自動水栓 B	混合水栓			
32	鏡	一般（ガラス）	ステンレス	なし			
33	洗濯置場	あり	なし				
34	流し台	あり	なし				
35	シャワー室	0812	0816	なし			
36	トイレ用将来給排水対応	あり	なし	初期対応		初期対応：トイレあり	
37	空調機	天井埋込	壁掛け			集中制御	
38	換気扇	天井扇	壁パイプファン	強弱あり		強弱：強制排気の有無	
39	コンセントカバー強化	強化あり	強化なし			触って危ない方のみビス止め	
40	加湿器	天井埋込	なし				
41	スイッチ	一般	キースイッチ				
42	照明	直付	埋め込み	間接照明			
43	調光	あり	なし				リモコンＬＥＤ
44	冷蔵庫置場	あり	なし				
45	見守りカメラ	あり	なし				
46	つくりつけテーブル	あり	なし				
47	つくりつけベンチ	あり	なし				

例外として、お部屋にできるだけ家具などを置かないほうが、その方の暮らしに好ましいと考える部屋は、14畳ではただ広く淋しいため12畳と決められた。

この個室帳は工事現場でも活躍している。我々のように設計から長くゆめふるにたずさわっているのと異なり、現場の職人にとってははじめて。なぜこの部屋の仕様がこうなっているのか、わからなくて当然である。しかしこの個室帳により、こうも一部屋ずつ違うのには理由があると考えてもらえるだろう。実際に「○○さんのお部屋は……」という会話も耳にした。この現場ではおのずとひとり一人と向き合うことになっているようである。

＜特性：現在支援内容＞
身体障害　布団での就寝　日向好き　演歌好き　トイレ近く　職員との距離
＜居室配慮＞
布団での就寝（ベッド転落の可能性）　畳・絨毯・クッションフロア等床等に座って過ごす日常スタイル
カラオケ見てみてルーム　日向スペースで音楽　おむつ等管理のためのクローゼット



春(西-1)Aさんの個室帳。部屋のサイズや、扉や収納、壁や床仕上げ、空調など各種設備の仕様を、居住者ごとにふさわしいものを選択し、工事担当者に伝えるために、このようなシートを全居住者分作成した。

支援員のための棟

ゆめふる成田にはもう一つ重要な棟がある。それが支援棟だ。

その名の通り支援員のための専用の建物である。当初我々は住まわれる人のことばかりを考えていて、会議や事務作業の場に加え、入居者と支援員の交流を前提としたプランを提案した。

ところがそれは大きな見当違いであった。理事長からはその理由を丁寧な文章でいただいた。5年前のセミナーの時と同じように、雷に打たれたかのような衝撃的な内容であった。

ここに一部原文のまま掲載させていただく。

労働には、頭脳労働、肉体労働とかがあります。
ソープランドで働くお姉さんは、内臓労働という方もいます。
私達の仕事は、感情労働であると、言われています。
いくら優しい支援員さんでも、排泄のお世話や、移動介助、食事の全介助、甲高い声の連続を4時間にわたって、あるいは、8時間の対応は、かなりストレスが溜まります。でも、感情をコントロールして対応することが大切です。　－（中略）　感情労働は、心を休めること、感情の演出からのリセットが必要です。
ですから、管理棟（支援棟）の休憩室は、利用者さんとの関係性の遮断を自由にできるようにしていただきたいのです。
－（中略）利用者さんと職員のふれあいの場は、建物が出来上がってから、職員と保護者でボチボチとそのコーナーを作ろうと思います。雑木林の下のベンチ、親子でお弁当が広げられる屋外テーブル＆ベンチなど。

2021.8.24 小林 勉

ゆめふる成田は2023.8月末の竣工に向かって、日々その姿を完成に近づけている。スタイル40が具現化できているのかどうか、それがわかるのはおそらく竣工から数年を経てのちだろう。繭の中のその人にしか味わえない安心とあたたかさ。そのようなものを果たして彼らは感じることができているだろうか。

おわり

自閉症へ寄り添うすまいがほしい
ゆめふる成田の施設づくり
2023 年 9 月 30 日発行

著者：河井美希・川﨑優里
発行者：株式会社 ゆう建築設計
編集・DTP：平塚 桂（ぽむ企画）

ゆめふる成田
所在地／千葉県成田市
主要用途／障害者支援施設
建主／
社会福祉法人 菜の花会

設計
設計・監理／
株式会社 ゆう建築設計
（河井美希、川﨑優里、
木内俊克）
構造／
株式会社 土屋設計
設備／
株式会社 幹設備設計事務所

施工
旭建設 株式会社

構造・構法
木造在来・軸組工法

規模
階数／地上1階
敷地面積／25,402㎡
延床面積／3,006㎡

工程
設計期間／2021年1月～
2022年5月
工事期間／2022年8月～
2023年9月

主な外部仕上げ
屋根／ガルバリウム鋼板
縦ハゼ葺き・瓦葺き
外壁／窯業系サイディング
外部建具／アルミサッシ、
木製建具

主な内部仕上げ
床／塩ビシートt2.0、2.8、
4.5
壁／ビニルクロス、EP-G
天井／ビニルクロス、岩
綿吸音板

設備
空調／ルームエアコン、
パッケージエアコン
換気／個室：第3種、
食堂：全熱交換機
給湯／LPGガス給湯器

主な設備機器
衛生機器／TOTO
大浴槽／小笠原
照明器具／大光電気、
パナソニック
雨水貯留施設／物林